

受験を支える義姉は、二人きりの夜だけ崩れる
―血のつながらない姉と、二人だけの家で―

血のつながらない義姉が、試験に挑む義弟を励ますうち、二人きりの夜にだけ素の女になつていく同居純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

職場でも、近所でも、みんな三澤霞みさわ かすみのことを「頼れる人」だと言う。

夜勤明けでも背筋を伸ばし、誰の前でも穏やかに微笑む、二十七歳の看護師。困っている人がいれば迷わず手を貸し、決して取り乱さない——そういう、芯の通った大人の女性だ。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のしんとした闇が、部屋の隅々まで満ちていた。家のなかには俺たち二人きりで、聞こえるのは、エアコンの低い唸りと、二人の乱れた呼吸だけ。枕もとの常夜灯のほのかな橙だいだいが、汗ばんだ白い肩を、淡くなぞっている。

カーテンの向こうでは、夜更けの住宅街が、しんと寝静まっている。隣の家も、向かいの家も、誰もが穏やかな眠りのなかにいる時刻。この家にだけ、まだ消えない熱が満ちていることを、世界の誰も知らない。机の上には、開いたままの参考書と、書きかけのノートが、灯りの落ちた部屋にぼんやりと沈んでいた。ついさっきまで俺が向かっていた、現実の象徴のようなそれが、今はひどく遠く感じられた。

昼間の霞を思い浮かべる。台所でコーヒーを淹れながら「悠くん、今日はどこまで進んだの」と、落ち着いた声で訊いてくる横顔。近所の人に呼び止められれば、品よく頭を下げて世間話に応じ、誰に対しても丁寧さを崩さない。職場の同僚から電話がかかれば、てきぱきと指示を返す。それが、みんなの知っている「三澤さんちの、しっかりしたお姉さん」だ。

ナースステーションでは、後輩に頼られ、患者の家族に深々と頭を下げられる人。スパーのレジ係にまで「いつもありがとうございます」と微笑みかける、隙のない大人の女性。誰の前でも一定の距離を保ち、決して取り乱さない――それが、世間の知っている三澤霞という人だった。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……悠くん」

ふだんは緩くひとつに結っている艶やかな黒髪が、今は解けて、汗ばんだ白い首筋に幾筋も貼りついていて。いつもは涼しげに伏せられている切れ長の目もとが、今は潤ん

で、まっすぐにこちらを見上げてくる。その視線に、ふだんの落ち着きはない。ただ一人の女の、剥き出しの熱だけがあった。

俺たちは、血のつながった姉弟ではない。

四年前、俺の父とこの人の母が再婚して、戸籍の上だけ「姉弟」になった。それまでは、互いの存在すら知らなかった、赤の他人同士だ。同じ名字を名乗り、同じ家で暮らしてはいても、二人のあいだに流れているものは、最初から「家族」という言葉では呼びきれなかった。

それでも——この一線を越えてはいけない、とずっと思ってきた。建前でも、俺たちは「姉」と「弟」だ。親が築いた新しい家庭を、自分の不甲斐なさで壊すわけにはいかない。試験に追い詰められて情けない俺を、この人はただ年上の姉として支えてくれているだけだ。そう自分に言い聞かせて、見ないふりをしてきた熱が、今、この夜にほどけてしまっている。

何度も、引き返せる場所があったはずだった。夜食を運んでくれた手を、ただ「ありがとう」と受け取って終わらせることも。落ち込んだ俺の頭を抱き寄せてくれた腕か

ら、そっと身を離すことも。けれど俺は、そのどれもできなかった。この人の体温を一度知ってしまうと、もう、知らなかった頃には戻れなかった。

壁の向こうの世界も、霞のことを「頼れるお姉さん」だと信じている人たちも、何ひとつ気づいていない。今この部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。それでいい、と悠は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも——俺だけが知っている。この人の、表の穏やかな顔と、誰にも見せない無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——